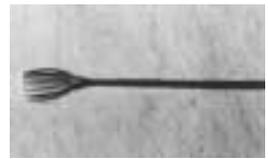


財団だより

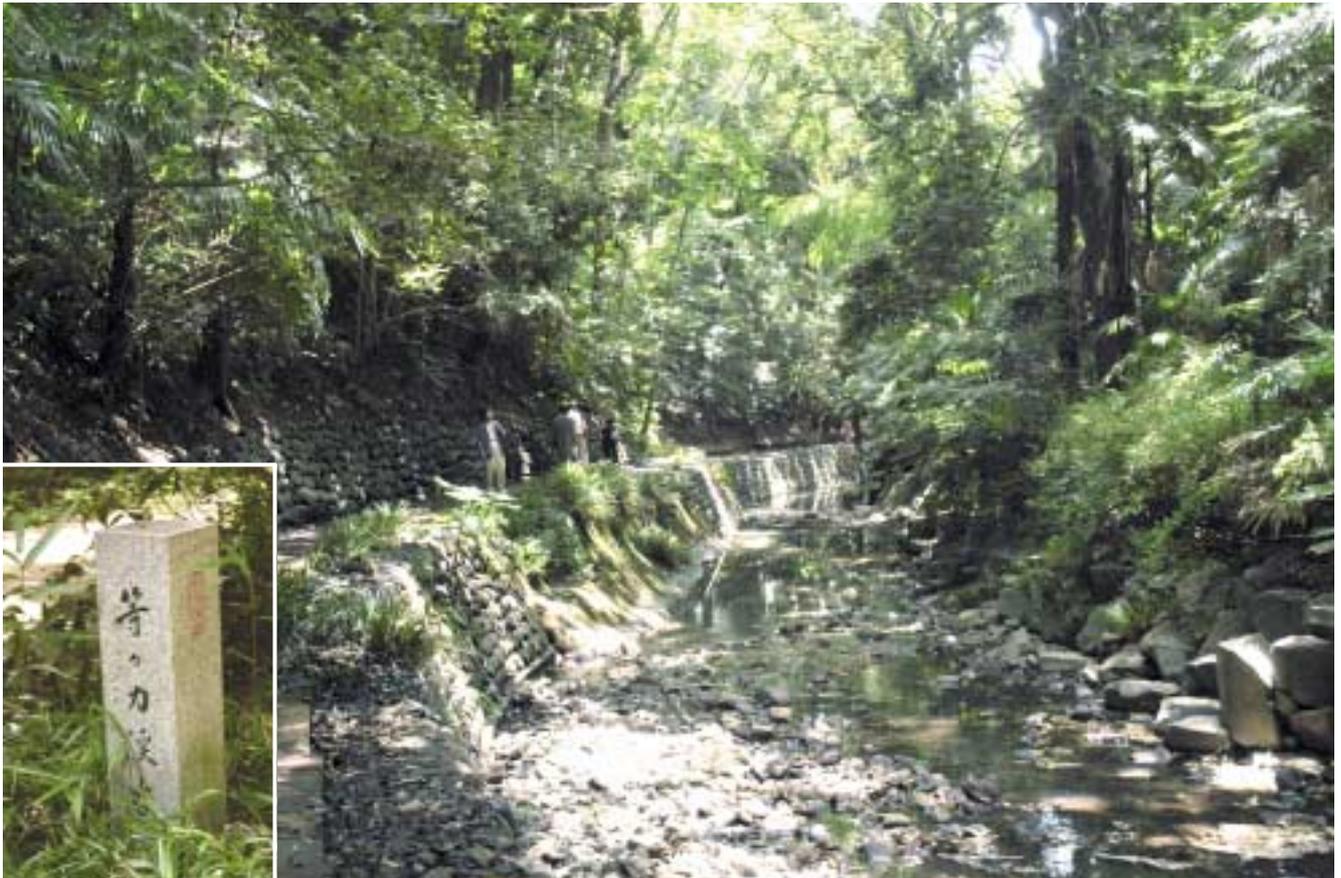
第119号

2008.9

多摩川



鮎投網用の簀 / 府中市立郷土館蔵



等々力溪谷

Photo & Text
遠藤 顕彦 (Hidehiko Endo)
渋谷区在住

目黒通り環状八号線の交差点付近、等々力不動下、谷沢川(ヤサワガワ)が多摩川に注ぐ手前で国分寺崖線の最南端に位置する約1kmの都内唯一の溪谷。谷沢川が国分寺崖線に切れ込んで侵食したもので、台地と谷との標高差約10m 溪谷。斜面にはケヤキをはじめシラカシ、コナラ、ヤマザクラ、イロハカエデなどとシダ類のような湿性植物が茂り鬱蒼とした樹林は都内に居るのを忘れさせられる様に感じました。

『等々力』の地名は、溪谷内にある『不動の滝』の音が響きわたり『轟いた』ことからついた、と言い伝えもあるそうです。昭和8年(1933年)等々力溪谷は風致地区として指定され、昭和49年(1974年)に溪谷の河川と斜面地の一部を風致公園として開園しました。

Contents 目次

- 巻頭言
私の少年時代 2
- 特別寄稿
21世紀の玉川上水が甦ります 3
- 八王子市のかんきょう 副読本 4
- 多摩川をシンボルにした美しい多摩づくり 5
- 奥多摩の山と自然を守るために 6
- 財団からのお知らせ
助成研究募集のご案内 7

私の少年時代



亜細亜大学
学 長 小川 春男

亜細亜大学に職を得て上京するまで、知多半島に住んでいた。川は山からすぐに海に流れ込み、いきおい、遊び場は山と海だった。

中学生になる頃まで、放課後は、冬は「どろじゅん」、つまり、かくれんぼ、それ以外の季節は週4日ほど、海か山へ遊びに行っただろう。伊勢湾に突き出た新堤防までの距離は1キロほど、町は昔の堤防から山側にあり、2つの堤防の間の埋め立て地には畑や養魚場、細い農道と、灌漑のための小さな川があった。海まで、すれ違う車もない農道を、歩いたり、あるいは二人乗りで友人と交代で自転車を漕いだ。水泳や釣りをするためである。とくに泳いだ後の帰りは、暑さと疲れに加え空きっ腹で、友人を乗せて自転車を漕ぐ番になったときはかなり辛かった。もちろん、小遣いはほとんど無く、海で釣るときは釣り餌のゴカイを採ってから、フナを釣るときは、どこかでミミズ、あるいは小さな川で赤虫を採ってからである。もっとも、釣り糸と針だけは、なけなしの小遣いを叩かなければならず、宝物だった。八ぜであれフナであれ、釣れるのは夕暮れ時である。母に叱られないよう、急いで家に帰って晩ごはん間に合わせた。

なぜか、麦わら帽子をかぶって夏の日差しを遮るものの全くない1キロ程度の一本道を懐か

しくも鮮明に覚えている。途中、キュウリやトマト、あるいはスイカやカボチャが、黄色く枯れかけた葉の間にぶら下がっていたり横たわっていた。はしゃぎながらも急ぐ心で自転車を漕いだ行き道と、疲れながらも晩ごはんに急いだ帰りの道。行きも帰りも道は遠かった。しかし、土と路傍に生い茂った雑草、その向こうに小川や野菜のある道は、間違いなく柔らかく、優しくかった。

25年近く前になるが、アメリカ東部のロードアイランド州立大学に研究で2年ほどいた。研究と自動車の生活で、芝生や森の自然に囲まれ、海も車で10分ほどのところにあっただが、身近に自然と触れ合うことはなかった。帰国間際に森の中を散歩したとき、ザーツという音が聞こえてきた。最初は何か不気味な音に聞こえたが、近くに行ってみると滝だった。幅と高さはせいぜい1メートルほど。2年間でせせらぎや滝の音を完全に忘れてしまっており、初めて聞くような新鮮さと驚きを感じた。滝はびっくりするほど大きな音であり、せせらぎの音は実に優しく魅力的だった。

今は整備された道路や公園に囲まれている。大学の一部を流れる仙川をピオトープ風にしたし、一部の校舎では屋上を緑化した。僅かでもという思いで進めたが、正直に言って何となくよそよそしさも感じる。土の道は埃っぽかったが、精一杯遊べた。「スタンド・バイ・ミー」や「少年時代」と同様、1キロほどの小道は、過ぎ去ったまぼろしだが、贅沢な思い出かもしれない。多摩川は、はるかに多くの少年や少女に沢山の思い出を作ってきたし、これからも作って行くに違いない。

特別寄稿

21世紀の玉川上水が甦ります

御苑の森に生まれる“内藤新宿分水”



東京大学
教授 石川 幹子

玉川上水は、多摩川の羽村堰から新宿区の四谷大木戸に至る約43kmの上水路で、承応3年(1654年)に江戸市中の飲料水を確保するために開削されました。『玉川上水起源』(1803年)によれば、この工事は、玉川兄弟(庄右衛門・清右衛門)により、わずか7ヶ月という驚異的な速さで工事が行われたと記されています。玉川上水は、本来の飲料水だけではなく、武蔵野台地における新田開発の水源として、多くの分水が引かれ(野火止用水、千川用水等)江戸・東京の発展を支えてきました。新宿区の四谷大木戸には水番屋があり、木樋や石樋により江戸市中に配水が行われたほか、余水は穂田川、渋谷川、更には古川となり、東京湾に注いでいました。

明治以降の近代化の中で、玉川上水は次第に、その役割を減じることとなり、1965年に新宿の淀橋浄水場の廃止に伴い、小平監視所以東の水路は、上水路としての役割に終止符が打たれました。しかしながら、玉川上水の復活を求める動きは大きなものがあり、1986年には、東京都の「清流復活事業」により、下水再生水が通水され、今日に至っています。この清流も杉並区の明大前附近で神田川に放流されているため、下流は全くの空堀となっています。

歴史的資産としての玉川上水を復活させたいという運動は、羽村市から新宿区まで、多くの取り組みが行われています。なかでも、四谷大木戸地区では、御苑の森に沿って開渠としての豊かな玉川上水が大正年間まで流れており、余水吐けに沿った地区には、水力を動力として鉛筆の生産を行っていた三菱鉛筆創業の地

などもあり、地域住民の皆さんが玉川上水の復活に向けて根強い運動を展開されてきました。

地域の思いが実現へと舵をきったのは、2006年、新宿御苑(環境省所管)が100周年を迎えたことを記念し、環境省・新宿区・地域が、共に実現に向けての協議の場を設けたことに始まります。数多くの検討会、ワークショップ等をへて、2007年には基本計画案がまとまり、現在、実施設計が行われています。

その内容は、御苑地区の玉川上水は、道路となっているため復元はできないため、隣接する御苑の外周林内に、新たに水路を開削するものです。水路幅は約1.5m、延長、約540mのささやかなものではありませんが、これまでの分水は、すべて玉川上水より取水したものであったのに対して、今回の分水は、空堀となっている玉川上水に水を供給する「21世紀の分水」を創り出そうとするものです。水源は、放射第五号線の新宿御苑トンネル内の湧水であり、都市化により損なわれた水循環を回復する役割をも有しています。豊かな森に水路が開削されることにより、クールアイランド効果をはじめ、生き物の宝庫としての生物多様性の向上が図られることとなり、環境教育の場としての役割も期待されています。



御苑地区に、玉川上水が甦る日がくるとは、数年前までは、「夢のまた夢」でした。『内藤新宿分水』という名前は、地域の皆さんにより名付けられたものです。地域に住む人びとの、あつい思いと誇りが、時代を動かしていくのだと思います。

多摩川に学ぶ

「八王子市のかんきょう」副読本



八王子市立松が谷小学校
校長 半田 あつ子

八王子市で環境教育の副読本作成委員会が立ち上がったのは平成17年ですから「八王子市のかんきょう」は3年の月日をかけて完成しました。平成19年度に委員になった私は、平成20年度から本格的に推進する環境教育の骨格となる副読本づくりに携わる責任とこれまで2年間の委員の方々の研究成果を形にする責任と、二重の責任を感じました。

八王子市は緑の多い自然豊かな土地柄です。環境教育の素材はどこにでもあるように思われますが、高尾山・陣馬山を擁する地域、市街地、ニュータウン地域と自然環境も様々な上に、学校によって児童数や関係諸機関等も様々です。1冊の副読本にまとめるには多くの課題がありました。

「八王子市のかんきょう」作成に当たって留意したことは「川」の教材化です。川にでかけていくと水遊びや魚取りだけでなく、川原は植物・動物（鳥類・昆虫など）の宝庫ですし、川原の石は上流からの手紙でもあります。ゴミの不法投棄も身近に目にするところです。まず川から環境学習を始めたいとも考えましたが、学校によって年1回校外学習で行くのがやっとという地域もありますので、環境に関する学習課題を見つける場所の1つとして紹介しました。市内の流域図を資料に入れ、多摩川、浅川、大栗川など近くで調べ

られる川と学校の位置が分かるように工夫しました。近年川での災害も多く発生することから、「川に行ってみよう」のコーナーに、服装、安全に関する留意事項を分かりやすく図にまとめて掲載しました。

「八王子市のかんきょう」作成に当たっては、とうきゅう環境浄化財団の皆様大変お世話になり、多摩川ジュニアガイド「多摩川へいこう」の資料ページから多摩川の野鳥・川虫の生態等の掲載を了承していただきました。心より感謝致しております。



留意したもう1つは指導書づくりです。初めて手にする先生方が学びの扉から学びの世界へという副読本の構成を理解していくために、簡単な指導の手引き書を作成し副読本とともに配布しました。

環境学習は総合的な学習の時間で行われることが多いと考え、児童が自ら環境に関する課題を見つける場を「学びの扉」と名付けました。「学びの扉」は川、公園・校庭、道路、給食室と4つの場面で児童一人一人が「？」を見つけるように設定しました。そこで見つけた課題を解決する場として緑・資源・水・大気の4つの「学びの世界」を設けました。学びの世界では八王子市のデータもより多く掲載し身近な環境の実態から課題解決して欲しいと考えました。

今年度活用し始めた「八王子市のかんきょう」が環境教育に成果を挙げていくよう念願してやみません。八王子市子どもたちが、環境にやさしい行動を起こしていくよう見守りたいと思います。



多摩川散歩

多摩川をシンボルにした 美しい多摩づくり



美しい多摩川フォーラム
事務局長 宮坂 不二生

私たち「美しい多摩川フォーラム」(会長：篠塚英子・お茶の水女子大学名誉教授)は、昨年7月に官民により設立され、はや1年が経過しました。悠久の母なる川として、地域の人々から最も共感が得られる「多摩川」をシンボルに掲げ、多摩川水系の流域周辺地域の各主体とイコール・パートナーとして連携・協働しながら、「美しい多摩づくり」を目指した運動を展開しております。具体的には、「経済」「環境」「教育文化」を運動の3本柱に据え、水環境を守りながら、地域経済の活性化に取り組み、そして、次代を担う子どもたちへの教育を通じて、地域の人々(多摩圏民)が生きがいを持って、自立した生活が送れるような地域の創造を目指しています。また、こうしたフォーラムの活動を通じて、地域の人々を強い絆で結び、そこに暮らす人々の自信や誇りが醸成されることも願っています。

当フォーラムの運営に当たっては、「美しい多摩づくり」を共通の目的として集まった個人、NPO、事業者、大学、行政が共通のテーブルを囲み、対等の立場で議論を交わし、夢の実現や課題の解決に向け、緩やかな合意形成を目指します。また、参加する個人、事業者、行政などの役割を定め、各主体が連携・協働し、実践していきます。こうしたプロセスを経てまとめられたフォーラムの基本計画が、「美しい多摩川



100年プラン」です。これはフォーラム運動の3本柱である「経済」「環境」「教育文化」の観点からまとめられており、それぞれ、広域連携・協働推進を強く意識した息の長い地域づくりの取り組みになっています。

例えば「経済」では、地域経済の活性化は、美しい多摩の桜を生かした観光まちづくりからとの考え方から、「多摩川夢の桜街道プラン」を進めています。9月には、多摩の桜をブランド化する桜の名所めぐりの観光サイトをオープンします。また、「環境」では、地球環境問題への取り組みは、身近な水辺の実態認識からと考え、「多摩川一斉水質調査プラン」のもと、先般6月、みずとみどり研究会と連携し、ダニエル・カール副会長も水辺に駆けつけ、第1回調査を実施し



ました。この調査を積み重ねていくことで、多摩川から環境メッセージを発信します。毎年8月と11月には、多摩川清掃イベントも行います。昨年の台風や大雨による多摩川の白濁化現象を目の当たりにして、今後、「美しい多摩川フォーラムの森」を設定し、水源の森林整備や啓蒙にも取り組みます。一方、「教育文化」では、次代を担う子どもたちへの環境教育が不可欠と考え、昨年8月から、幼児を対象とした「多摩川の森の環境教育」を半年間実施し、成果を上げました。また、「多摩川教育河川ネットワークプラン」を掲げ、流域各地で活動する水辺の楽校等の交流ネットワークをつくり、環境教育や自然再生事業をサポートするほか、12月開催の「多摩川子ども環境シンポジウム」で成果を発表します。

美しい多摩川100年プランは今年度スタートしたばかりです。一緒に考えみんなで実行していく進化・発展する計画です。当フォーラムでは、このプランをより良いものとしていくため、ともに活動していく仲間を募集しています。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

【お問合せ先】美しい多摩川フォーラム事務局
(青梅信用金庫地域貢献部内)

TEL : 0428 - 24 - 5632 FAX : 0428 - 24 - 4646
E-mail : forum@tama-river.jp

私と多摩川

奥多摩の山と自然を守るために



国立公園奥多摩サポート
レンジャー会
会長 石井 秀典

私達の会は、東京都レンジャー（自然保護員）の活動を支援するために、平成18年6月に設立したボランティア組織です。東京都サポートレンジャーとして活動するには東京都が主宰するサポートレンジャー養成講座を終了することが必要であり、当会にあっては養成講座第5期までの終了者69名が会員となり活動しております。

活動内容は、東京都奥多摩地域の山々を巡回しながら登山者の案内、自然公園利用マナーのPR、登山道や道標等の点検と補修、そして自然環境保全のための動植物調査等を行っています。赤いジャケットを着て年間約100日間は奥多摩の山々を巡回等しております。活動方法は、東京都レンジャー（奥多摩地域は9名）の支援活動として、都レンジャーと共に奥多摩の奥深い山への巡回活動、植生保護等活動、そして登山道や沢に架かる栈橋等の補修、道標設置等の作業を用具や資材を担ぎ上げて実施しています。

奥多摩の山は、最近、登山事故が多く発生し事故防



止が課題となっているので、そのお役に立ちたいと行動しております。サポートレンジャー独自の活動としても、山々の巡回活動を行い、巡回中のザックの中に

は小型の鍬や補修用具を持参し登山道等の簡易な補修を行いながら歩いており、また登山者の方々と会話をして登山事故の防止やマナー等のPRを行っております。

自然環境保全のための調査としては、特定地域での植物フェノロジー（生物季節性）調査、哺乳動物等の生息調査、そして開花植物の調査等を実施しています。これらの活動結果は奥多摩サポートレンジャー会サイト（URLは下記参照）で公開しており、特に巡回しながら収集した旬の自然情報は、奥多摩の自然を多くの人に知って貰うための情報発信基地として活用したいと考え、今後さらに内容の充実に努めることにしています。



このように私達の活動は「山」が多くなっていますが、奥多摩等の山々から発する多摩川の流れは常に意識して活動しております。山と川の自然環境は密接な関わりがあるので、沢等の水量、汚染、土砂崩壊等を検証しながら巡回しており、そして河川敷の清掃、夏には沢を歩き渓谷の利用調査、ごみ収集等を都レンジャーと共に実施しています。また、植物調査の一環として多摩川上流の河川敷に生育するニッコウキスゲの調査を行っています。生育環境（岩場）および開花時期（6月上旬）等が他のニッコウキスゲと異なることもあり、生育場所および生育状態等の調査を継続し実施して行くことにしています。



このような活動の実施が、奥多摩の安全登山と自然環境の保全に寄与できるものと確信して、山と自然が大好きな仲間が「山への恩返し」を思っ楽しく熱心に活動しています。

【奥多摩サポートレンジャー会サイト URL】

<http://park.geocities.jp/okutama2006/index.htm>

財団からのお知らせ 助成研究募集のご案内

多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究・活動助成の募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団(会長 西本定保)は、1975年(昭和50年)より、多摩川およびその流域の環境浄化の促進や自然環境の保全などに必要な調査や試験研究を毎年公募してきています。その結果、これ迄に491件(学術研究296件、一般研究195件)の調査・試験研究のお手伝いをさせていただきました。

2009年(平成21年)4月からの助成についても、従来と同様、意欲的な調査や試験研究を募集致します。

1. 応募資格者

下記研究対象テーマに掲げた調査や試験研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 助成研究対象テーマ

産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究。

排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究。

多摩川およびその流域における水の利用に関する調査および試験研究。

シンポジウム、音楽会あるいは出版等による環境啓発活動や、歴史的な遺産あるいは社会システムの維持保全・回復運動等、多摩川及びその流域における環境保全や文化の創造に広く寄与するもの。

3. 応募方法

当財団所定の申請書に必要事項を記入、捺印の上、財団宛ご提出下さい。

「募集要項」「申請書」はホームページ上からダウンロードするか、200円切手同封の上、財団宛ご請求下さい。

<http://home.q07.itscom.net/tokyuenv/>

4. 助成の決定

2009年(平成21年)3月に開催予定の当財団選考委員会で選考のうえ、理事会に諮って最終的に決定致します。

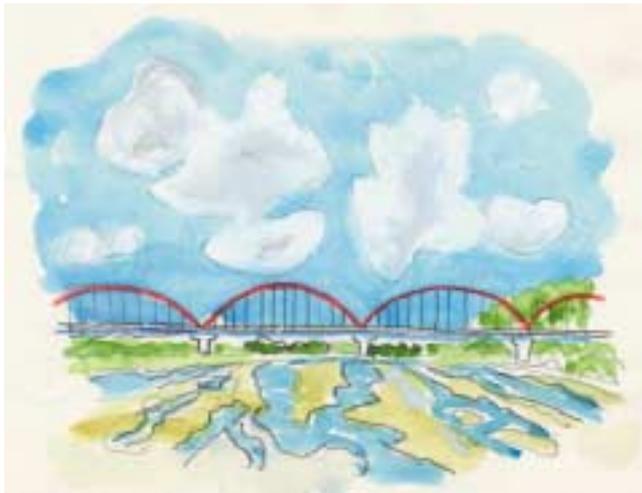
5. 応募締切日 2009年(平成21年)1月15日(木)

6. 応募にあたっての注意事項

ご応募にあたっては、当財団の定める「調査・試験研究助成に関する調査・試験研究の選定基準、助成の方法、調査・試験研究の実施方法、助成金の支払い方法ならびに調査・試験研究者の個人情報の保護の方法に関する規程」を必ずお読み下さい。

過年度に不採用となった調査や研究の再応募は受付けておりませんので、同一の調査・試験研究課題で再応募される場合は、前回のものと調査や試験研究の内容のちがいがよく判るよう工夫して、申請書をご作成下さい。

(次ページへ続く)



「拝島水道橋と多摩川の河原」

作者 山口 善弘 (やまぐち よしひろ)

1940年東京都生まれ。一級建築士。
 そのかたわら、山や川の絵を描き続ける。
 各地で個展を開催し、好評を博している。
 国土交通省関東整備局京浜河川事務所発行の季刊誌「ひと・かわ・まち」(1999年VOL.4～2005年VOL.29)の表紙の絵を飾った。

7. 助成研究の種別と諸条件

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の区別	環境問題改善のための調査や試験研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。 (財団のホームページで過去の研究事例をご参照下さい)	環境問題改善のための調査や試験研究で、一般の市民が、特別な学識経験を必要とせず取り組めるもの。
1件当たりの助成金総額の上限額	400万円	100万円
単年度の助成金上限額	200万円	100万円
研究期間	最長2ケ年	最長2ケ年
助成対象費目	(1) 器具備品費 原則対象外。ただし所属機関や個人で所有するものがなく、調査・試験研究や活動に必要な不可欠なものと選考委員会で認められたものはこの限りではない。 (2) 消耗品費 調査や試験研究に用いる各種材料、部品、薬品等。 (3) 旅費 調査や試験研究のための交通費、宿泊費等。 (4) 謝金 調査や試験研究のために臨時に雇った人の謝金等。 (5) その他 器機・設備などの賃借料、通信費、その他。	
<p>尚、学術研究については、研究計画の全てが助成金によるものではないこと。旅費、謝金は、それぞれ助成金要望額の30%を上限の目安とすること、上限の目安を大幅に超える場合は、その理由を詳細に記した説明書を申請書に添付してご提出下さい。</p> <p>一般研究については、従来からの調査・試験研究に加えて、シンポジウム、音楽会あるいは出版等による環境啓発活動や、歴史的な遺産あるいは社会システムの維持保全・回復運動等、多摩川およびその流域における環境保全や文化の創造に広く寄与すると思われるものも選考の対象といたしましたので、奮ってご応募下さい。</p>		

発行日 平成20年9月1日

編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14

(渋谷地下鉄ビル8F)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuenv>

